

自然誌 だぶり 夏

Natural history

三重自然誌の会情報誌 85 号

2010年 9月

自宅で見つけたニホンヤモリ

ニホンヤモリは爬虫類に属し、守宮あるいは家守と書かれることから人間生活との関わりが深いことが想像されます。

私が初めてニホンヤモリを見たのは、大学を卒業した昭和51(1976)年で、場所は大阪府堺市にあった会社の寮の窓でした。その後、出会ったのは数えるほどしかなく、はっきりしているのは四日市市塩浜の磯津漁協の壁を這っていた記憶だけです。伊勢市については、河北(1993)に旧伊勢市街、富田(2001)に神宮の外宮における報告があります。

今回、私の住んでいる伊勢市(旧小俣町)において、ニホンヤモリを確認したので報告します。

2010年8月16日の夜、自宅の庭に面した南側の窓のカーテンを娘が何気なく開けたところ、網戸に張り付いているニホンヤモリ(写真1)を見つけました。その個体は、その後庭に出てはっきり見ようと近づいた妻に驚いて姿を消しました。翌17日は妻が西側の玄関灯にいる個体を見つけましたが、自宅内の家族に知らせようと呼びにきている間に姿を消しました。23日には再び庭に面した網戸に張り付いていたことから、我が家に留まっているようです。私がこの地に家を建て住み始めてから30年あまりになりますが、ニホンヤモリを見たのは今年が初めてです。自宅ではこれまで庭をカナヘビとトカゲが闊歩していましたが、忍者のようなニホンヤモリが今回加わり、新たな楽しみが増えました。

参考文献：河北均，1993．伊勢市のヤモリ．三重動物学会会報，(16)：54p．富田靖男，2001．ニホンヤモリの屋外における記録．三重動物学会会報，(24)：48p．



写真1 網戸に張り付いたニホンヤモリ

〈中 優：伊勢市小俣町本町1284〉

ニホンヤモリ～日本守宮～ *Gekko japonicus*

上 田 利 彦

ニホンヤモリは、有鱗目トカゲ亜目ヤモリ科で、本州、四国、九州、対馬などに生息しています。漢字で「守宮」「屋守」「家守」と表記されることからわかるように、そのすみかは家屋であることが多く、人の生活に密着した身近な生物であるといえます。

全長は100mm～140mmで、体色は主に薄い灰褐色、体表にトカゲやカナヘビのような鱗片はなく、顆粒状鱗で覆われています。その体は戸袋や柱と壁の隙間などに隠れるのに好都合なように平たい形状をしています。壁やガラスでも這うことができるその足の表面は指下版と呼ばれる幅広い鱗に覆われており、その一枚一枚の表面に細かな鉤状の毛が生えていてそれを引っかけて這っています。

夜行性で、外灯の下や窓の明かりに寄ってくる蛾などの昆虫類を捕食しています。

さて、子供の頃から生き物が好きだった私が、とりわけ手にしてみたかった生き物のひとつがヤモリでした。家にあったリチャード・ゴリス著の「日本の爬虫類」（小学館）を眺めてはその猫のような目をもったトカゲ？が気になって仕方ありませんでした。残念ながら、私が生まれ育った旧久居市新町では生息していなかったようで、一度も見たことがありませんでした。

十数年ほど前、現在の津市久居一色町に家を建て住み始めたのですが、引っ越して数か月経った頃、玄関先でようやくヤモリを見つけました。新築の家でしたので、偶然材木についてきて住み着いているものと思いながら、毎夜懐中電灯を片手に観察し始めたところ、しばらくして明らかに数個体のヤモリがいることに気がつきました（写真1）。いまでは家の周りで十数個体を確認できるようになりましたが、毎夜同じ場所で餌となる虫を待ち受けるなわばりを持つらしい個体と、比較的移動する個体とが確認できています。

また、最近では、我が家だけではなく、近所の工場の外灯の下、ゴミ収集所の壁面、そして先日は近所のカリンの木の幹でその姿を確認するにいたり、建物だけでなく広くこの地域に生息していることがわかってきました。

我が家では、灯りのついている部屋の窓にあかりに誘われてやってくる虫をねらって出てくるヤモリを家族で楽しんでいます。初夏には、ガラスに張りついていて個体のおなかに卵があるのを見ることができます。やがて8月の中旬になると5cmくらいの小さな個体が出てきます。ガラスに張り付くその足は、小さな紅葉の葉っぱのようでなかなか可愛らしいです（写真2）。猛暑が続く今夏、夕涼みをかねて毎夜ヤモリの観察に明け暮れている今日この頃です。

さて、ニホンヤモリは県内広い範囲で生息していると思われますので、お気づきの方が見えたら、生息情報を三重自然誌の会メールアドレスまでお知らせ願いたいと思います。いまのところ、友人の情報などで、県内の他の地域では、四日市市赤堀、津足大谷町、津市片田町、津市安東町、松阪市飯南町での生息を記録しています。

ニホンヤモリは、懐中電灯で照らしたり、近くで見ようと近づくと“するする…っ”と隠れてしまう非常にシャイな生き物です。灯りに寄ってくる蛾などを捕食してくれますし、「屋守」でもあり、この可愛らしい隣人はそっと見守っていききたい生き物です。



写真1 わが家のヤモリ（2匹）

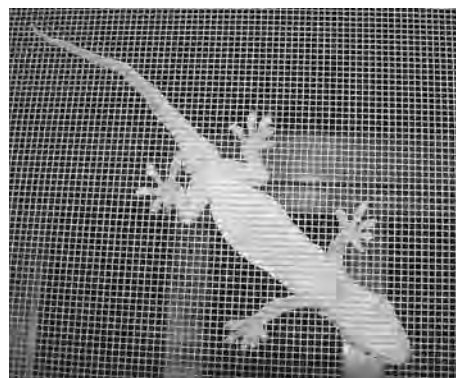


写真2 裏側からみたヤモリ

〈うえだ としひこ：津市久居一色町〉

テッポウムシタケは三重県でも発生していた

奥 田 貞 助

テッポウムシタケ *Carayseps nakazwai* Kawamura は、カミキリムシの幼虫（鉄砲虫の方言名がある）の頭部か尾部に発生する冬虫夏草で、本邦に特産し、京都、大分等の6道府県で発生が確認されていますが、三重県では今までに発生確認の記録はありません。

本種の発生期は7～9月で、子実体は1～複数、楕円形～長楕円形の頭部と、これを支える円柱形の柄の二つの部分からなり、弾力のある肉質、頭部は明るい淡褐色をしています。朽木性で、まれに腐朽した伐根の周囲の地中から生じ、地生型ともなり、発生地の針葉樹林内倒木や立ち枯れ上、トチノキ、マツの伐根跡に発生するようです。発生頻度は、「普通」、「少ない」、「やや稀」、「稀」の4ランクされている中で、3番目の「やや稀」にランクされている珍しいものです。学名は、大分県で冬虫夏草の採集活動に貢献された元長洲病院長中沢実氏を記念して献名されたそうです。

さて、三重県で発生していたテッポウムシタケ（写真1）ですが、発生していたのは伊賀市下友生地内にある三重県上野森林公園内の針葉樹林内で、2010年7月11日に、同公園職員である坂上優子氏が園内を見回り中、アカマツの腐朽した切株の崩れかかった地中から発見された（写真2）。本来、アカマツの腐朽した切株で発生していたもので、切株が腐朽して地上に崩れ落ちたため、地上型となったものと思われます。

発生していた場所は、伊賀市南東部に位置する里山エリアで、アカマツ、スギ、ヒノキ等の針葉樹林で、豊かな自然が残り、適度な湿気があり（写真3）、テッポウムシタケ発生に適した場所であると思われました。

故人になられた日本冬虫夏草の会会長であった清水大典先生は、「先を急がず、常に下を見て歩け」と言っておられましたが、普段何気なく歩いているところで、ふと下をみれば珍しいテッポウムシタケのような冬虫夏草が発生している現実があるわけです。今回の発見をされた坂上氏は、キノコに興味を持っておられたようで、その素養があったから新しい発見につながったのではないかと思います。

冬虫夏草は、むつかしいところに発生するものではありません。自然の保たれたところであれば、家の庭先にも発生します。松阪市内の家の庭先でセミタケが発生した例があります。たまには庭をのぞいたり、里山を下を向いて散歩してみてもいかがでしょうか。新しい発見があるかもしれません。

ちなみに、採集されたテッポウムシタケは、三重県立博物館に標本として寄贈されたようですので、同博物館で観覧することができますと思います。

文末ですが、テッポウムシタケ発生現地の調査にあたり協力をいただいた上野森林組合、発生現場を案内していただき、撮影写真を提供してくださった坂上優子氏に厚くお礼を申し上げます。

参考文献：清水大典．1997．冬虫夏草図鑑．家の光協会．



写真1 上野森林公園で発生していたテッポウムシタケ(坂上優子氏・撮影)



写真2 上野森林公園で発生していたテッポウムシタケの発生状況(坂上優子氏・撮影)



写真3 テッポウムシタケが発生していた上野森林公園針葉樹林

〈おくだ ていすけ：松阪市小黒田町 513-7〉

名張市赤目溪谷の地衣類

葛 山 博 次

2007年4月7日、名張市の赤目溪谷において、日本地衣学会主催の観察会が開催された。講師は、日本地衣学会会長（当時）で、秋田県立大学の山本好和先生であった。会長をはじめ、地元の植物愛好家や学校関係者らの参加で、楽しくなごやかな観察会となった。コースは、キャンプ場から乙女滝付近までのわずかな区域であったが、多様な地衣類に接し学習することができた。

当日記録された種は次の通りである。（ ）内は、筆者が採集した標本のNo.である。

1. *Cetrelia nuda* W.L. Culb. & C. F. Culb. トコブシゴケ (写真1), 岩上 (葛山-27886)
2. *Cladonia coniocraea* (Flörke) Spreng. ヤリノホゴケ, 石上 (葛山-27876)
3. *Cladonia humilis* (with.) J.R.Laundon ヒメジョウゴゴケ, 岩上 (葛山-27875)
4. *Cladonia ramulosa* (with.) J.R.Laundon ヒメレンゲゴゴケ, 岩上 (葛山-27884, 27893)
5. *Cladonia rappii* Evans ヒメヤグラゴケ, 岩上 (葛山-27892)
6. *Cladonia scabriuscula* (Delisa ex Duby) Nyl. ササクレマタゴケ (写真2), 岩上 (葛山-27862, 27873, 27894)
7. *Coccocarpia palmicola* (Spreng.) Arv. & D.J. Galloway コナカワラゴケ, 石上 (葛山-27866)
8. *Collema flaccidum* (Ach.) Ach. イワノリ属の一種 (和名の記載なし), ソメイヨシノ幹上 (葛山-27882)
9. *Collema subflaccidum* Degel. トゲカワホリゴケ (写真3), 岩上 (葛山-27861)
10. *Dirinaria applanata* (Fée) D.D. Awasthi コフキジリナリア, イロハモミジ幹上 (葛山-27902)
11. *Heterodermia dissects* (Kurok.) D. D. Awasthi チヂレゲジゲジゴケ, タブノキ幹上 (葛山-27895)
12. *Heterodermia pseudospeciosa* (Kurok.) W.L. Culb. ヤマゲジゲジゴケ, 石上 (葛山-27878)
13. *Hypotrachyna pseudosinuosa* (Asah.) Hale タカハシウメノキゴケ, 落枝上 (葛山-27867)
14. *Leptogium azureum* (Sw.) Mont. アオキノリ, 岩上 (葛山-27890)
15. *Lobaria retigera* (Bory) Trevia var. *retigera* チヂレカブトゴケモドキ, 岩上 (葛山-27889)
16. *Menegazzia terebrata* (Hoffm.) A. Massal. センシゴケ, マルバアオダモ幹上 (葛山-27870)
17. *Myelochroa entotheiochroa* (Hue) Elix & Hale クズレウチキウメノキゴケ, 岩上 (葛山-27868, 27897)
18. *Myelochroa leucotyiza* (Nyl.) Elix & Hale ヒカゲウチキウメノキゴケ (コナウチキウメノキゴケ), 岩上 (葛山-27872)
19. *Parmelinopsis minarum* (Vain.) Elix & Hale トゲウメノキゴケ (写真4), 石上 (葛山-27877), ソメイヨシノ幹上 (葛山-27874)
20. *Parmelinopsis spumosa* (Asah.) Elix & Hale コナヒメウメノキゴケ, ソメイヨシノ幹上 (葛山-27891)
21. *Parmotrema tinctorum* (Nyl.) Hale ウメノキゴケ (写真5), ソメイヨシノ上 (葛山-27885)
22. *Peltigera polydactylon* (Neck.) Hoffm. モミジツメゴケ, 石上 (葛山-27864)
23. *Peltigera praetextata* (Flörke ex Sommerf.) Zopf チヂレツメゴケ (写真6), 湿岩上 (葛山-27863)
24. *Pertusaria commutate* Müll. Arg. ヒメトリハダゴケ, 岩上 (葛山-27896)
25. *Phaeophyscia limbata* (Poelt) Kashiw. クロウラムカデゴケ, 石上 (葛山-27881)
26. *Porpidia albocaerulescens* (Wulfen) Hertel & Knoph. var. *albocaerulescens* ヘリトリゴケ (写真7), 岩上 (葛山-27880)
27. *Punctelia rudecta* (Ach.) Korg トゲハクテンゴケ, 岩上 (葛山-27879)
28. *Pyrenula japonica* Kurok. サネゴケ (アオゾメサネゴケ), ケヤキ幹上 (葛山-27883)
29. *Rimelia clavulifera* (Räsänen) Kurok. マツゲゴケ (写真8), アカマツ幹上 (葛山-27888)
30. *Stereocaulon exutum* Nyl. キゴケ, 岩上 (葛山-27871)
31. *Stereocaulon japonicum* Th. Fr. var. *japonicum* ヤマトキゴケ, 岩上 (葛山-27869)
32. *Stereocaulon sorediiferum* Hue オオキゴケ, 岩上 (葛山-27879)

種名は、Hiroshi HARADA, Tatsuya OKAMOTO & Isao YOSHIMURA (2004), A Checklist of Lichens and Lichen - allies of Japan, Lichenology vol.2, No.2 に従った。



写真1 トコブシゴケ



写真2 ササクレマタゴケ

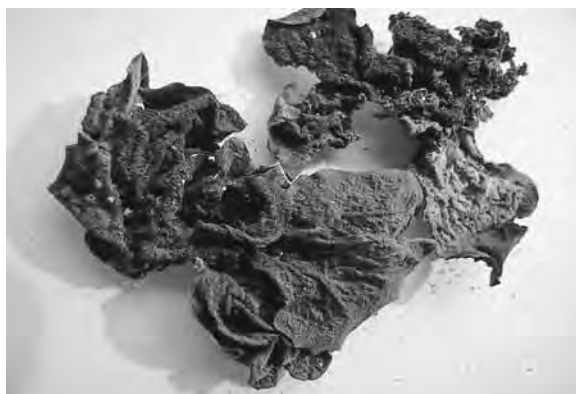


写真3 トゲカワホリゴケ



写真4 トゲウメモドキ



写真5 ウメノキゴケ



写真6 チヂレツメゴケ

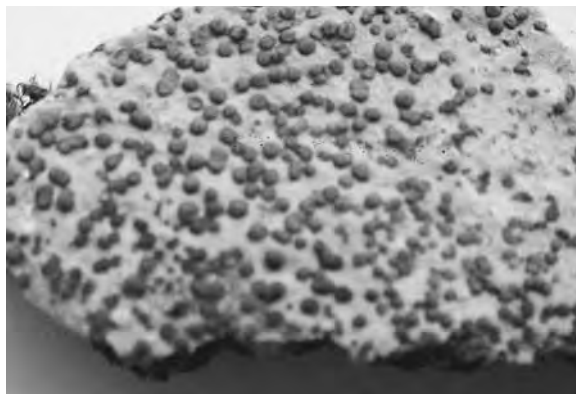


写真7 ヘリトリゴケ



写真8 マツゴケ

〈かつらやま ひろし：いなべ市北勢町別名659-5〉

鹿児島までハマナツメを見に行き、わかりかけたこと

山 本 和 彦

本誌春号（自然誌だより84, 2010）で岡山県に産するハマナツメ（クロウメモドキ科）のことを報告しましたが、さらにこの8月、ハマナツメを追いかけ鹿児島の薩摩半島と出水市まで行ってきました。この調査行については、鹿児島県立博物館学芸員の寺田先生に大変お世話になりました。全く面識のない私に、鹿児島県のハマナツメ生育地を丁寧に教えてくれました。また喜入のマングローブ林（メヒルギ林）に案内していただき、メヒルギの特性をわかりやすく説明してくれました。寺田先生のお話では、鹿児島県には甕島の海跡湖周辺に大きなハマナツメ群落があり、他には薩摩半島の万之瀬川河口、出水平野、そして種子島には3ヶ所ほど見られるとのことでした。

甕島は一昨年渡り、調査済み、種子島は時間的な余裕もないため、今回は万之瀬川河口と出水市に絞り現地へ行ってきました。この2つのハマナツメ生育地について簡単に説明します。

万之瀬川河口

万之瀬川は南さつま市北部に位置し、薩摩半島でも最大級の河川で東シナ海に面した吹上浜海岸に流れ込んでいます。河口部では川幅が400mほどになり、南九州で最大規模といわれている河口干潟が発達しています。この河口から約1.5km上流の左岸沿いからさらに約1km上流にかけての干潟には1000株を越えるハマボウが生育し、日本最大規模といわれる群落形成されています。ここは干潟の生物相も豊かで、2007年に「万之瀬川河口域のハマボウ群落及び干潟生物群集」として国の天然記念物に指定されています。このハマボウ群落の中にたった1株、ハマナツメが生育しているとの情報を寺田先生からいただき、早速、現地へ行ってみました。ちょうどハマボウが満開で見事なハマボウ群落に圧倒されながら（写真1）、猛暑の中、広い群落内を歩くこと2時間弱、やっとハマナツメを見つけました。樹高6.6m、根元から出ている幹の数22本、ハマボウとたくさんのメダケに囲まれている割には大きなサイズのハマナツメでした（写真2）。それぞれの幹の太さを測り、グラフにしたのが図1です。大きくて健全な株と思ったのですが、次の世代の若い幹が出ていないのが図からわかります。ハマナツメの1つ1つの幹の寿命は30年前後ですから、太い幹も何年かすればやがては枯れ出します。その頃まで次の世代が何本か萌芽し、育っていればよいのですが・・・少し気がかりなところ です。



写真1 万之瀬川のハマボウ群落



写真2 万之瀬川に1株だけ見られるハマナツメ（メダケが混生）

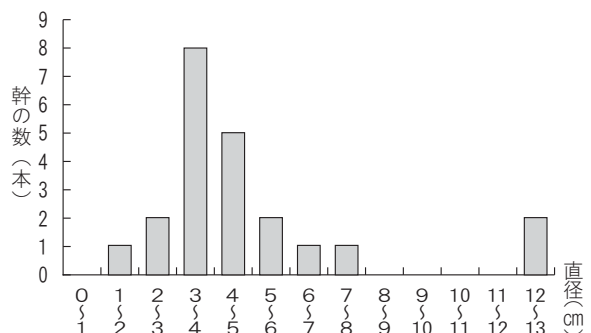


図1 万之瀬川のハマナツメの直径分布

出水平野

出水平野は八代海に面し、ツル渡来地として有名なところです。この渡来地より北西に1 kmほど離れた干拓地を流れる小さな川の川岸にハマナツメの小群落が見られました。ここの生育地も寺田先生から情報をいただいて訪れたのですが、万之瀬川とは違い、樹高1～3 mの低木の小群落2ヶ所と樹高6 m前後からなる小群落2ヶ所の少しまとまったハマナツメ群落となっていました(写真3)。

川岸に降りたのですが、泥沼のようなところで、ぬかるみに足を取られないよう注意しながらハマナツメ群落にたどり着き、幹の太さの計測と植生調査を行いました。ハマナツメ群落の下は、過湿状態の泥土でセリやヨシがわずかに見られるだけで、ほとんど植生がない状況でした(写真4)。蒸し暑さと蚊の攻撃には参りました。

ハマナツメの個体数は全部数えることはできませんでしたが、小さな個体も含め多くても50株ほどでした。この群落で樹高6 m前後のハマナツメ5株の幹の太さを測り、その結果を図にしたのが図2です。万之瀬川河口のハマナツメと違い、出水のそれは直径の小さなサイズも多く見られ次世代が順調に育っているようです。

ハマナツメの個体数

鹿児島、宮崎、高知、徳島、岡山、和歌山と渡り歩き、ハマナツメの分布する各県の個体数がある程度わかってきました。まだまだ見ていない分布地も多くあり、大雑把で不正確なものですが、これまでの調査と文献から個体数をまとめてみました(表1)。この表からも三重県は圧倒的に個体数が多いことがわかります。ただ、近年シカによる幹の剥皮や芽の採食により、衰弱あるいは枯れだしているハマナツメが目立ってきました。須賀利大池では1100株ほどあったのが、現在半分まで激減しています。これもシカの食害が一つの原因かと思われます。他県では今のところシカの食害は見られませんでした。なぜか三重県では大池だけでなく、大部分の生育地でシカの食害が目につきます。

昨层高知県の海辺でハマナツメを調べていたところ、一頭のシカが調査地の横を走り抜けました。他県でもシカがハマナツメまで食べ出すのは時間の問題なのかもしれません。

表1 各県のハマナツメ個体数

三 重 県	和歌山県	岡山県	高知県	徳島県	大分県	長崎県	宮崎県	熊本県	鹿児島県
5000～6000※1	10未満	30未満	10未満	10未満	10未満※2	100未満	100未満	?	400未満

※1 この個体数はシカの食害等の影響を受けていない頃の個体数で、近年須賀利大池では、シカの強い食圧等により半数近くまで減少している。県内の他の地域でも同様で、このままシカの食害が続くと近い将来半減する危険性がある。

※2 真柴茂彦「ドクトル真柴の植物のおと」から引用。



写真3 出水のハマナツメ群落景観（右側の川岸）



写真4 出水ハマナツメ群落の中（過湿の泥土）

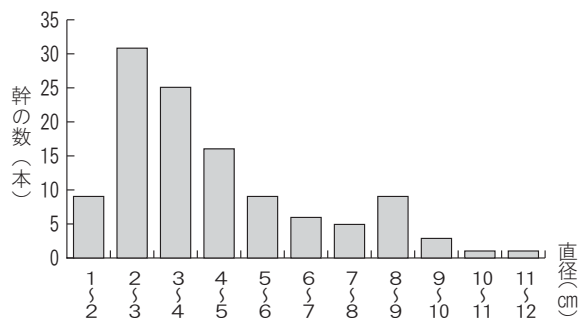


図2 出水平野のハマナツメの直径分布

宮川水系大内山川でのボウズハゼ確認の報告

水 口 道 成

2010年7月21日午前9時頃、三重県度会郡大紀町阿曾を流れる大内山川にて1個体のボウズハゼを捕獲、さらに7月28日午後2時頃に同じ場所で1個体を目視確認したので、ここに記録する。

今回7月21日に確認した個体は、地元住民が大内山川の阿曾地区において鮎の友釣りで釣り上げたものである。場所はJR阿曾駅前近くの大内山川で、体長は14cm程度の個体であった(写真1)。この釣り人によると、釣った場所の川底岩盤にボウズハゼ数匹が並んでへばり付いているとの事だったので、7月28日に確認のため川に潜ってみた。残念ながら、当日はその様な光景を見ることはできなかったが、川底で藻類を食べている1個体を目視確認することができた(写真2)。現場の水深は約120cmで、比較的流れの強い瀬となっており、幾つかの大きな岩が目立つ場所であった(写真3)。この個体は腹部がかなり膨らんでおり卵を持っていると思われた。捕獲していないのではっきりとしたデータはないが体長はやはり14cm程度であったと思われる。その後数回にわたり現場を訪れたが、ボウズハゼは目撃していない。

ボウズハゼは、三重県度会郡大紀町阿曾と隣町の同町柏野において地方名で「カシワノ」と呼ばれている。柏野とその周辺でしか見かける事ができないから「カシワノ」なのだそうだ。昔は沢山いたが現在では全く姿を見ないという幻の魚で、年齢50歳以下の住民ではその存在を知る者は、ほぼ皆無に近い状況だ。住民の話から推察するに50~60年程前を境に激減したようである。筆者も「カシワノ」の姿を確認したのは今回が初めてであるため、良い機会と考え報告することにした。



写真1 釣り上げたボウズハゼ



写真2 目撃したボウズハゼ



写真3 ボウズハゼの生息環境

〈みずぐち みちなり：大紀町阿曾〉

事務局から

○原稿募集

会報「自然誌だより」の原稿を募集しています。次号「秋」の原稿締め切りは11月末日です。書き方等が分かりにくい場合は事務局までお問い合わせ下さい。また、会誌「三重自然誌」も年度内発行を目指していますので、こちらにもご投稿ください。

編集
後記

今年の夏は暑かったですね。雨もまったく降らなくて、野山の草木の葉も縮こまっているようにみえました。不思議なのは「水不足」がまったく話題にならなかったことです。「節水」が行き届いてきているのでしょうか？短い記事でも歓迎ですので、原稿をお気軽にお寄せください(善)。

自然誌だより85号

発行日 2010年9月30日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp